

# 世界で活躍する人材を 養成するための真の外国語教育とは



- 吉田 研作 ● 上智大学言語教育研究センター長  
鳥飼 玖美子 ● 立教大学特任教授(大学院異文化コミュニケーション研究科)  
鈴木 佑治 ● 立命館大学生命科学部教授  
高島 健造 ● 玉川学園IB担当シニアスタッフ

(司会)

仙波 憲 一 ● 青山学院大学学長 / インテリジェンスセンター広報・情報部門長

—敬称略—

## 急務とされている 語学力を身につけた人材育成

仙波 グローバル化が急速に進展する中、豊かな語学力・コミュニケーション能力を身につけ、国際社会で活躍できる「グローバル人材」の育成が課題となっています。

しかし現状では、日本人の語学力はまだまだ低く、TOEFLスコアの国別ランキングを見ても、日本人の語学力の実態は百六十三カ国中百三十五位、アジアの中では三十カ国中二十七位と、極めて低位置に甘んじている状態です。

そうした中、政府の関係会議においても、「英語ができないために日本企業が内向きになり世界の流れに逆行している」といった議論がなされているほか、大学における外国人教員の採用拡大も打ち出されました。さらに、大学入試や卒業認定におけるTOEFLなどの外部検定試験の活用を推進、大学における英語による授業比率の向上などの提言もなされています。

このように、グローバル人材を輩出するための大学における語学力の向上が課題とされていますが、現在のそうした風潮、傾



(2013年6月26日 私大連盟会議室にて)

向についてどのように考えていらっしやるか、まずは率直なご意見をお聞かせいただけますでしょうか。

### 語学力とは、英語力ではなく コミュニケーション能力

吉田 語学力といえは、外国言語ばかりが注目されがちですが、私は、母語、外国語にかかわらず、コミュニケーション自体の問題にもっと目を向けるべきだと考えています。

その意味で私が最近注目しているのは、「CEFR」(ヨーロッパ言語共通参照枠)という言語の学習・教育・能力評価の基準です。このCEFRでは、言語の技能に際して、A1からC2まで六つのレベルに分類しています。そして、それぞれのレベルに応じて、言語を使ってできることが事細かく規定されています。

その中で特に参考にしたいのが、C1やC2です。このレベルになると、「熟練した言語使用者」として、論理的な思考を駆使して、相手に考えを伝えたり、相手の意見に反論したりしながら自己主張できると規定されています。これはまさに、日本の

新しい学習指導要領の目玉の一つに挙げられている「言語力の育成」とも共通する考え方です。つまり、語学力とは、単に話したり聞いたりといった表現能力だけでなく、相手とどのようにやりとりをするのかという基本的なコミュニケーション能力も含まれているわけです。

このような総合的な語学力を身につけることができれば、自己主張することはもちろん、相手と議論を展開し、円滑に意思疎通も図ることができるようになり、国際的な場で活躍することもできるでしょう。

グローバル人材の育成を具体的に検討する場合には、このCEFRにあらためて注目すべきであり、非常に役に立つ基準だと思っています。

鳥飼 グローバル化の進展の中で、「グローバル人材Ⅱ英語力」であるという考え方が日本で急激に広まってきていることに私は疑問をもっています。政府の「グローバル人材育成推進会議」審議まとめ(二〇一二年)が「グローバル人材」の要件の筆頭に「語学力」つまり英語力を挙げた影響が大きいでしょうが、私は英語さえできればグローバル人材だとは思いません。

確かに、世界で活躍するためには、国際共通語としての英語が役立ちますが、「英語さえできればいい」という風潮はいかかなものか。もっと基本的な「コミュニケーション能力」と、それを支える内容と人間性こそが必須だと考えています。

吉田先生がおっしゃったCEFRですが、これが欧州評議会で作られた背景には、母語使用は基本的人権であり、すべての言語は守られるべきだというEU(欧州連合)の「多言語主義」理念があります。そこから、相互理解のために母語以外に二つ以上の言語を学ぼうという「複言語主義」が生まれ、学んだ成果を測る尺度としてCEFRが開発されました。CEFRでは、多言語を前提にしていますから、異質な文化をもつ人同士が関係を構築していくためのコミュニケーション能力を非常に重視していません。

自分の主張をくり押しするのではなく、かといって相手に屈服して言いなりになることもない。お互いが相手を尊重しながら根気強く、自分の考えや主張を論理的に筋道を立てて説明していく。そんな相互行為(インターアクション)能力の習得を目指

しているのです。  
日本ではそのあたりの議論が抜け落ちていくように思います。

### 「国際化」と「グローバル化」の違い

#### 現状認識に立つた外国語教育のあり方を

鈴木 日本 の現状を見てつくづく感じるのは、国際化とグローバル化が混同されているということです。国際化というのは、確固としたネーションステートが存在していることが前提であり、そのエリートたちが交渉する世界です。この場合、英語を例にとると、フォーマルイングリッシュを話せることが、その交渉の場に参加できる最低限の条件になります。

一方、グローバル化とは、国境を越えて、個人と個人、村と村が直接結びつく世界で、そこで使われる英語は正しいか正しくないかではなく、さしあたり通じればよいのです。例えば、ロサンゼルスでさえ、その一角ではさまざまな言語が飛び交う中、人々が話すのはフォーマルイングリッシュからほど遠いだけだった英語です。英語圏でさえ、英語がグローバル化していることを示す象徴的な現象です。

今はまさにグローバル化した時代ですから、世界の研究機関は自らプロジェクトをつくり出し、どんな英語であろうとも発信することを当然のように行っています。私がいいうプロジェクトとは、私たちが頭の中にあるメッセージ、情報を、ICT (Information and Communication Technology) などを使って、projectの元義である「投影する」という意味であり、すなわち、コミュニケーションするという意味です。特に、私が所属する立命館大学生命科学部の専門とするライフサイエンスでは、こうしたプロジェクトが日常的に行われ、英語で発信されています。

日本の現状を見ると、国際化さえ対応できなかつたところに、グローバル化が訪れてしまい、後手に回ってしまっている感が否めません。そうした現状認識をしようで、これからの言語能力や外国語能力はどうあるべきかを考えていかなければいけないと思います。

高島 語学力というと、「言葉を学ぶ力」と理解したいところですが、実際は単純に「外国語ができる」ととらえられているくらいがありますね。

さらに、コミュニケーション能力と語学力の位置づけがあいまいなところも気になります。本来なら、まずコミュニケーション能力があつて、語学力はその要素の一つに位置づけられるはずですが、そのような認識は広まっています。

玉川学園では、国内・海外の大学で通用するスキルや学習の姿勢などを身につけさせるため、国際バカロレア機構のIBプログラムを実施するクラス（IBクラス）を設けています。

二〇〇七年にIBの教育プログラムを取り入れて以来、このクラスではコミュニケーション能力の向上に向けて、外国語を使つてさまざまな学習方法に積極的に取り組んできました。しかし、完全にすべてが成功しているとは言いがたい状況です。

なぜかというと、コミュニケーションは、主張するだけでは不十分だからです。鳥飼先生がおっしゃるように、互いに自分の意見を発信しつつ、相手とのやりとりを行う中で、新しい合意を見いだしていく行為が本当のコミュニケーションです。

その意味では、コミュニケーションを図る中で、自分の考えを柔軟に変える勇気を

もたせることも大事なことになるかもしれません。そのように考えますと、母語よりもむしろ外国語のほうが向いている場合もあるでしょう。外国語で表現する場合には、時間をかけて言葉も考えなければいけないし、相手の意見をじっくり聞く必要もあります。その過程で、自分の意見と共通する点、食い違う点も見いだしやすいのではないのでしょうか。

### 外国語教育はスキルの習得か？

仙波 外国語教育にとどまらず、コミュニケーションや言葉に対する理解など、言語教育を取り巻く根本的な問題について、皆さんからご意見をうかがいました。

中でも、自分の意見を主張するだけでなく、相手の主張にも耳を傾け、新しい合意を得るといふコミュニケーション能力の重要性を、皆さんは共通におもちでいらつしやるように思いました。

では、こうしたコミュニケーション能力は、最終的な何かを導き出すための「スキル」として理解すべきなのでしょうか。そのあたりの基本的なご認識についてお聞か

せいただければと思います。

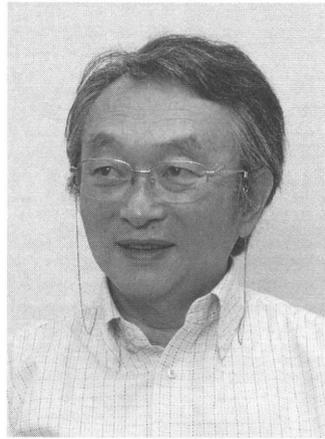
鳥飼 私は言語もコミュニケーションも、単なるスキルだとは考えていないのです。スキルという技術論にとどまらず、もっと全人的なものとして考えるべきだというのが私の意見です。

コミュニケーションとは単なる対話のやりとりではなく、異質な存在である他者との相互行為であり、他者との接触、話すこと、書くこと、読むことを通じて行われる「関係構築」だと解釈しています。

母語であろうと外国語であろうと、どのように異質な相手と対峙するかとなると、人間力そのものが問われざるを得ないと思います。

吉田 母語を使ってコミュニケーションを図る際には、言葉が占める割合はほんのわずかです。その意味では、コミュニケーションは全人的なものにならざるを得ないと私も思います。ただし、異なる文化・環境で育った人間同士が、言葉を介さずにどこまで理解できるかという点、これは別問題として考えなければいけません。

やはり、言葉は、異文化間のコミュニケーションを成立させる条件として欠かせな



吉田 研作氏

いツールであり、最も能率的な手段である  
と言えるでしょう。

当然のことながら、母語話者同士でやり  
とりするとき以上に言葉の重要性は大きく  
なると思います。そしてそうしたレベルに  
おいては、やはりスキルが必要になるでし  
ょう。どのような言葉を使うとコミュニケ  
ーションが成立しやすいかという観点での  
スキル教育は無視できないと思います。

### 「コミュニケーションとは、

### メディアを駆使して考えを伝えること

鈴木 私はコミュニケーションの出発点  
は、一個体の頭の中でメッセージをつくる  
ことにあると考えており、これがプライマ



鳥飼 玖美子氏

リー・コミュニケーションです。そして、  
そのメッセージを個体間で交換するのがセ  
カンダリー・コミュニケーションであり、  
その手段がセカンダリー・メディアです。  
このセカンダリー・メディアの中で最も大  
きい存在が話し言葉や書き言葉です。

ただし、頭で生まれる五感覚のメッセ  
ジをうまく言語化するのには容易ではありま  
せん。ICTの発達で、言語と一緒に視覚  
や聴覚を伝えるメディアは発達しましたが、  
現在でも、味覚や触覚、嗅覚の表現の伝達  
は困難です。言語を含め、メディアを駆使  
して、自らのメッセージをいかに相手に誤  
解を与えず伝えるのかという点では、スキ  
ルの必要性は無視できないと思います。



仙波 憲一氏

鳥飼 実際のところ、言語によるコミュ  
ニケーションは極めて複雑でダイナミック  
な行為です。話された言葉と話者が伝えよ  
うとしている意図とは、必ずしも一致しな  
い場合があります。

普通の発言のように聞こえても、実は皮  
肉や冗談であったり、言にくいことを婉  
曲な言い方で表現することもあります。

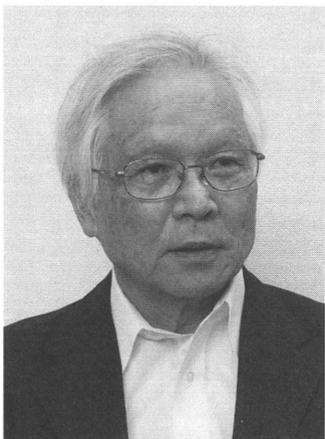
それを読み取り、真意をくみとりながら、  
相手の気持ちを傷つけないように慮りつつ、  
自分の主張をじわじわと通していく。これ  
こそがコミュニケーションです。これは技  
術的な方法として教えただけではなかなか  
身につかないんです。だからこそ、就学前  
は家庭で、その後は学校で、子どもたちは

失敗したり、傷ついたり、言葉の怖さを体感したり、試行錯誤を繰り返しながら、コミュニケーションを学んでいくのです。

### 鈴木

例えば「淡泊」という言葉があります。私の妻は、淡泊な味が好きですからよい意味で使うのですが、こてこての味が好きな私が淡泊という言葉を使うときはよい意味では使いません。あるとき、私があたる人のことを「あの人は淡泊だ」と言ったところ、私は否定的な意味で言ったつもりですが、妻は肯定的な意味でとらえていました。価値観によって意味するところが変わってしまう一例です。

コミュニケーションとは、価値観を基礎に展開されるメッセージの交換です。言語



鈴木 佑治氏

の意味との価値観に左右されニュアンスが変わることがあります。

### 学校教育は

### 気づきをいかに与えていくか

高島 今お話しになったことと関連しますが、中高生レベルだと、外国語を使つて発言すれば、自分の考えは相手に通じる、相手も自分と同じように考えてくれると考えてしまう傾向が強いですね。具体的に言えば、英語を使つて何とか相手に意味を通じさせることができた時点で、もともと相手も同様のことを考えてくれていたんだと思ひ込んでしまう。しかし、それは明らかに思ひ込みです。



高島 健造氏

自分と相手とは、育ってきた環境がまるで違うわけですから、思考過程も同じではありません。そのことについてコミュニケーションをとりながら、子どもたち自身が気づいていくことが重要です。

コミュニケーションとは、価値観を基軸に展開されるメッセージの交換です。言語の意味はその価値観に左右され、ニュアンスが変わることがあります。

鳥飼 私も成長や発達において、「気づき」は大切な要素だと思います。いかに教育のプロセスの中で、「気づかせるか」が問われているのですが、その実践は非常に難しいですね。

仙波 おっしゃるとおり、子どもたちは、小学校から大学まで、さまざまな「気づき」を得て、理解をつみ重ねていくものです。その意味で私も初等中等教育の段階では特に、コミュニケーション能力を身につけるにあたって、「気づき」は重要な要素だと思います。

ただし、鳥飼先生がおっしゃったように、教育のプロセスの中で、気づきを意図的に与えていくのは簡単なことではありません。ふと気づくからこそ気づきなのであって、

いくら先生方がそのためのプログラムをつくっても、意図的に気づかせることはできませんから、かなり工夫が必要だと思いますが、いかがでしょうか。

## 気づきを誘発するための教育の 質的転換と「発信の場」の必要性

**吉田** 一方的に上から知識を伝授するような授業をやっているかぎり、絶対に気づきは生まれません。気づきは自律的学習者の中にしか生まれませんからです。

では、どういうときに気づきが得られるかというところを体験する中で「ギヤップ」を感じたときにほかなりません。例えば、自分は知識があるつもりだったのに、ないということがわかった。そのときに「ナレッジギヤップ」を感じて、「これ、何だろう。もっと知りたい」と思うようになる。

また、どのように相手に伝えるべきかわからないという「コミュニケーションギヤップ」に遭遇したときも、新たな気づきを得るきっかけになります。

こうしたギヤップを教育の中でなるべく多く提供してあげなければいけない。その

ためにも、教え方そのものを、教師中心から生徒中心、学習者中心に変えていく教育の質的転換が必要だと思えます。

**高島** 先ほど鈴木先生が淡泊という言葉为例にご説明されましたが、自分としてはマイナスの意味で発信していながら、相手はそれをプラスのイメージで理解する。あるいはその逆もあるでしょうが、その誤解が生じたときに気づきは生まれますよね。

同時に、自分では相手が喜んでくれるだろう、理解してくれるだろうと発言したのに、相手が気分を害してしまうということもある。これも気づきの一歩だと思えます。

**鈴木** 国際会議の同時通訳でも、日本語で訳している意味と、外国語で訳している意味が微妙に食い違って、誤解が生じる場合もありますよね。国際会議のようなシビアな場ではこうした誤解は避けなければなりません。コミュニケーションという観点で言えば、最初から理解されると考えないほうがよいかもしれません。むしろ、誤解が生じやすいことを前提にコミュニケーションをするほうがよさそうです。

相手にメッセージを発信し、相手からの返答にも応じる。その過程で誤解が生じて

も、やりとりを繰り返していくうちに、「お互いに違うんだ」「価値観が違うんだ」ということを理解する。そして、その価値観の違いを評価し認め合うようになる。相互理解はそうして生まれるということでしょう。その意味では、やはり教育のあり方もこれまでの「知識伝授型」から「発信型」に転換すべきだと思います。

その点で大いに参考になるのが、幼稚園の授業です。私は幼稚園の教育プログラムをつくるお手伝いをしていますが、まだ言葉をも十分に扱えない時期ですから、さまざまな手段を用いて発信しようとしています。それが聞いている保護者らに非常に感動を与えるんですね。

文化間だけではなく、年齢や性別も含めて、さまざまな違い、価値観の違いを乗り越えるため、十全にコミュニケーションを図るためには、やはり発信し合うしかないんですよ。互いに共感、エンパシーを感じ合えるようになるかが、今後の教育のキーワードになるのではないのでしょうか。

**仙波** 立命館大学の生命科学部では、鈴木先生を中心に、画期的な発信型の英語教

育を確立されたとお聞きしています。ぜひ、その内容をお聞かせください。

**鈴木** 私たちが展開しているのは「プロジェクト発信型英語プログラム」という学部・大学院一貫プログラムです。一・二年次では日常生活や授業の関心事について、三・四年次では専門分野の関心事について、そして大学院では研究分野について、それぞれプロジェクトを行い、その成果を英語で発信します。

まず、一・二年次で取り組むのが、発信モードの英語力を育成して英語を使えるようにすることです。学生たちは穴埋め問題などの受験英語にはたけていますが、聞き話し、読み、書きの四つのスキルにおいて使えるレベルには達していません。

そこで、「プロジェクト」と称する授業では、自分の関心事につきプロジェクトを組み英語で発信し、並行して「スキル・ワークショップ」と称する授業があり、プロジェクト発信に必要な四つのスキル、文法、語彙・表現、発音などをインテララクティブにブラッシュアップしていきます。

一年次には、自分の趣味や身近なものをテーマにプロジェクトを行い、基本的なり

サーチとプレゼンテーションの方法を学びます。

二年次には、ディベートやパネルディスカッションを行い、二千語程度のアカデミックペーパーの執筆、プレゼンテーションを行います。

三年次には、ライフサイエンスに特化した「専門英語」がスタートします。ネイチャー誌を読み、インスパイアされたことをテーマにプロジェクトを組んで、ポスタープレゼンテーションを行い、チームペーパーを書き、専門性の高い英語発信能力を身につけます。

そして四年次になると、卒業論文のアップロードを英語で執筆し、ポスタープレゼンテーションをします。

### 教員はすべてに答えをもたずともよい

**鈴木** 結局、私たちが追求していることは、学生たちが自分たちで考えたこと、リサーチしたことを発表する「場」づくりです。もちろん、学生たちは自分の興味・関心に基づいて発信しますから、私たち教員も知らないことが多くなりますが、それで

もかまいません。教員はすべてに答えをもっていないといけないと考えられがちですが、知識は際限がありませんから、わからないことがあるのが当然で、学生と一緒に新たな知に挑戦すればよいのです。

学部創設から六年目に入りましたが、国際学会で英語で発表している学生の数は少なくありません。しかも、力をつければつけるほど、ほかの言語・文化との交流が増えて興味をもつようになるところがおもしろいですね。

**鳥飼** 私も日本の教育は、発信型の教育に転換すべきだと思いますが、まだまだ不十分です。おそらく、日本固有の文化の問題も起因していると考えています。

日本は、お互いに暗黙の了解を共有した「ハイコンテクスト」の社会ですから、発信量が少なくても、あうんの呼吸で皆が了解してしまう。つまり、居心地がいい社会なんです。ですから、小学校でも「和」が大切にされます。お友だちとは仲良く、先生を敬い、調和を保った学級経営がなされているのは、そうした文化的な背景があるのです。

これはこれでいいことではあるのですが、

日本語で自分の言いたいことを言えないよ  
うな子どもが、英語で主張できるわけがあ  
りませんから、グローバル人材の育成、自  
律性の涵養、発信力の強化という観点から  
すると、正直どうかと思います。

日本文化を否定するつもりはありません  
が、もっと意見を表明することのできる環  
境をつくり、出る杭を打とうとせず、子ど  
もたちの個性を認め、伸ばしていく方向に  
舵を切ったほうが、子どもたちのコミュニ  
ケーション能力は伸びるのではないでしょ  
うか。

**鈴木** 日本社会もローコンテクストなと  
ころがないわけではありませんが、学校教  
育になると、とたんにハイコンテクストに  
なってしまうですね。つまり、「わかっ  
ているでしょ」「こんなことしちゃいけない  
でしょ」という慣習化されたルールです。  
逆にローコンテクストとはどういうもの  
かというところ、何が飛び出すかわからない世  
界です。予定調和ではないからこそ、そこ  
に創造性が生まれるのです。

本来、子どもたちも、さまざまなことを  
言いたいし、可能性を試したいはずで  
す。しかし小学校では、言いたいことを自ら抑

制して黙ってしまふ。そこが日本の教育の  
問題の一つですね。

### 惜しむらくは「ゆとり教育」の方法論

**鈴木** 加えて、詰め込み型教育も大いに  
問題があると思います。そうした日本特有  
の教育が海外で評価されていると喧伝され  
る向きもありますが、海外でも特徴ある有  
名校は、子どもたちに時間を与えて、考え  
させる教育に力を入れていきます。

例えば、方程式を習ったとすると、その  
方程式が身の回りの出来事にどうあてはま  
るのか、自分で考えさせるのです。それによ  
って方程式にはこういう意味があるんだ  
ということを経験的に覚えさせるんです。  
日本もゆとり教育が導入されて、そうした  
教育が進むのではと期待されたわけですが、  
うまくいきませんでした。

私はゆとりという考え方自体に問題があ  
ったとは思いません。しかし、実際に行わ  
れたのはゆとり教育ではなく、単にそれま  
での詰め込み型の授業時間を削減しただ  
けで、本質的には導入前と何も変わって  
いなかったんですよ。そこに問題があったと

思います。

そうした検証をすることなく、詰め込み  
型教育が復活されることになったのは、い  
ささか残念ですね。

**鳥飼** ゆとり教育の理念は非常にいいも  
のでした。ただ、教育現場では、その理念  
を生かす方法をうまく見つけることができ  
なかつたように思います。

**吉田** おっしゃるように、ゆとり教育で、  
何をすればいいのか、現場がわからなかつ  
たということは大いにありますね。その意  
味で非常に惜しいのは、新しい学習指導要  
領の「言語力の育成」が打ち出された時期  
です。もつと以前に出ていけば、ゆとりの  
時間で実施できたかもしれません。

というのも、言語力の育成では、教科を  
通して、自分が感じたこと、思ったことを  
「なぜ」という問いに答えながら、誰もが  
わかるように論理的に説明する能力を育成  
するわけです。その中には国語力から音楽  
鑑賞まで、さまざまな分野が入っています。  
ゆとり教育の中で、十分に時間をかけて授  
業を進めれば、子どもたちの総合力、思考  
力も伸ばすことができたのではないかと  
いう気がします。

**高島** ゆとり教育がうまくいかなかったのは、大人がコントロールしようとしすぎたことも原因の一つではないでしょうか。

もともと子どもは、われわれ大人には計り知れない、大きな可能性や力をもっています。その本来もっている力を引き出すことに徹していればよかったのに、教師の側が、子どもたちに与えよう、与えようとしてしまった。

子どもたちが示す、これをやりたい、あれをやりたいという意思を尊重すべきだったと思います。

### 知識伝授型、還元主義的な教育と今の教科書の弊害

**鈴木** さらに言えば、現在の英語の検定教科書も何とかならないかと思ってしまいます。ガイドラインはつくっていいと思いますが、本来なら無限に存在する英語のコンテンツを、なぜその一部だけを取って教科書に刷り込み、毎年毎年繰り返し使わなければいけないのでしょうか。

学習指導要領に沿って、知識を積み上げるのには適しても、もし生徒が内容がつまらなくて投げ出してしまったりすると、そ

の瞬間英語嫌いができてしまいます。しかし、学問はそういうものではないはずですが、そのあたりも、知識伝授型、要素還元主義的な教育の悪影響が出ていると思います。

**吉田** 私は検定教科書の編集に長年携わっているのですが、競争相手が多くいるほど、つまり教科書会社が多いほど教科書の質は落ちるんですよ。その背景には、編集よりも営業のほうの方が強いということがあります。

われわれ編集委員が時間をかけて、議論を繰り返して、現在の学習指導要領の理念に基づいた新しい提案をしても、それを営業が独自に現場の声を聴取して覆してしまう。たいてい、新しい提案は現場受けが悪いので、こういうのは使えない、前のままのほうがいいという結論になって、却下されてしまうんです。

教科書会社は教科書売るのが目的ですから、結局、営業の意見、つまり教育現場の意見に負けてしまうんですね。

もし、世の中に一つしか教科書がなければ理念どおりなものができますが、競争相手がいればいるほど、現場に合わせた教科書しかできなくなってしまうんです。

**鳥飼** しかし、その割には各社とも内容が似通っていますね。

**吉田** 変わったものを出すと売れないということがわかってきましたから、結局、革新的なものは世に出なくなるんです。

**仙波** 究極の競争は同質性の中にあると言いますよね。みんなで競えば競うほど、同じ方向に向かってしまうのでしょうか。

**吉田** さらに、教科書の採択も、現場の意見、つまり使い勝手がいいか悪いかという一点で左右されます。

先ほどからお話が出ている「発信力」をつけることを目的にした「英語表現」の科目でも、文法色の強い教科書が採択されてしまうということがよく起きます。ディベートやディスカッション、スピーチなどの力を養成するための教科なのに……。

中身と本来あるべき姿である理念が乖離してしまっている教科書がけっこう多いです。

**高島** 教科書に関して、私が一番残念だなと思うのは分量です。あまりにも少ないのももちろん、現在の教科書に示されている分量が最低限であるという認識があればいいのですが、教科書を見た子どもたちは、こ

れだけやれば十分なのだと思います。いまから、今の三倍、四倍の分量がある教科書が出てきてもいいのではと思います。しかしそういった教科書は売れないのでしようね。

**吉田** 売れないでしょうし、そもそも教科書にはページ数に制限がありますから、各社ともだいたい同じページ数になってしまっんです。

中学校までは義務教育だから検定教科書であるのはしかたがないにしても、高校では検定教科書はなくてもよく、もっと自由にすべきだという意見もあります。

先生自らが生徒に合った教材を選び、授業を行うようなシステムにすると、当然、先生方は責任を負うことになりますから、より意欲的に取り組むようになると思います。今のように与えられた教科書だと、教科書に書かれていることを終わらせればいいんだという意識が強くなってしまおうということも考えられますから。

### 初等中等教育の問題は

#### 「大学入試」に元凶があるのか？

**仙波** 現在の中学・高校の教育に大きな

影響を与えていると言われているのが、「大学入試」です。高校の授業は入試の内容に合わせて行われる場合が多いですから、もし高校の教育に問題があるとしたら、大学入試も同様に問題があるといわなければなりませんように思うのですが、この点については、皆さんどのようにお考えをおもちでいらつしやいますか。

**鈴木** 今は大学入試偏差値の高い大学に何名合格したかが、その高校の評価基準となつていますが、入学試験の問題を解くことができたからといって、必ずしも英語力の養成にはつながらないのも事実です。

その典型がセンター試験における発音の問題です。実際のところ、発音に正解なんてないんですから。アメリカでそのような問題を出すと、こんな問題でなぜ私が不合格になるのかと訴訟の対象になるかもしれません。

現に、知り合いのネイティブの大学生に、センター試験の発音問題を解いてももらったのですが、ことごとく不正解でした。

**吉田** 無理ですよ。あれは本当の英語じゃないわけですから。

**鈴木** 文法や語彙・表現の問題もそうで

すよね。英語は語彙も表現も際限がないほどあってこれが絶対正しいという解答をつくるのが難しい。文法は限られており、試験に出しやすいい反面、山をはりやすいで引っかけ問題が多くなります。かくして難問奇問が続出し、ハウツーものの対策問題集が必要となつてしまふ。

結局、グローバル社会で通じない、テストイキングのスキルばかりが身につけてしまっんです。

**吉田** 中高の英語教育は大学入試のための学習になつている。そこが問題ですね。

**鳥飼** ところが、近年は大学入試のあり方も大きく変わってきました。現在、国公私立大学合わせて、英語の筆記試験を受けているのは入学者全体の半数です。

私立大学に限れば、入学者の六割がペーパーテストを受けずに、AO入試や推薦入試などで入学してきます。つまり英語の筆記試験を受けて入学する学生は四割しかないんです。

さらに、その試験内容も様変わりしていて、最近の大学入試問題を分析したデータでは、従来型の文法問題を出している大学は国立ではほとんどない、私立でも平均す

れば一割程度というところだ。

センター試験も、文法や読解はごく一部で、コミュニケーションを意識した問題が多く出題されるようになってきています。

高校教育の現場では、受験英語のせいでコミュニケーション能力を鍛えられないと言いますが、現状を詳しく見ると、はつきり言って、それは言い訳にすぎないのではないかとさえ思います。

**吉田** 要するに、試験の波及効果の問題ですね。よく、試験がこうだから教え方はこうならざるを得ないという意見が聞かれますが、鳥飼先生がおっしゃったように、調査してみると、実際の波及効果はほぼないことがわかります。つまり、試験は大きく変わっているのに、先生たちは旧態依然の教え方を続けているということです。おそらく、この教え方じゃないと大学受験に受からないと、高校の先生方が思い込んでいるのだと思います。

**鳥飼** 現状では、受験生も高校の先生方も、予備校にすがっている傾向が強いですよ。予備校にもそうしたい思い込みがあった、大学の急速な変化に追いついていないということはないですか。

**吉田** 予備校は大学の変化に敏感だと思えますが、入試問題の過去問集にも問題がありますね。十年前の問題を解くことがあまり意味のあることとは思えないのですが、受験生に多くの問題に接してもらおうと、たくさん解かせようとする。それが影響しているのかもしれない。

### 解答パターンに近づけることが 学力ではない

**高島** 受験英語には一つの解答のパターンがあります。そのパターンに慣れることが、英語ができることだとかたくなに信じている人が多いように思います。解答のパターンに近づけることが学力だという誤解が蔓延しているんですね。それは学力でもないし、語学力でもないということは、深く認識する必要があります。

**鳥飼** 政府も現在の入試制度に問題があるという思い込みがあるようで、教育再生実行会議の第三次提言において、「大学入試や卒業認定におけるTOEFL等の外部検定試験の活用」が盛り込まれましたね。あえてTOEFL「等」と、ほかの試験が入る余地も残していますが、これを導入す

ると、今度は高校を挙げてTOEFL対策に血道を上げるようになると思うのですが、これはいいことなのでしょうか。

**鈴木** アメリカではTOEFLを入学試験の一部として用いることはしていません。一定の点数をとれば、大学に入る資格がありますよという、いわゆる診断テストですから、入学試験には適さないと思います。

**鳥飼** しかも、インターネットで受験する「TOEFL iBT」は、画面の前で四時間半も試験を受けるわけですから、隣の人がスピーキングテストで話している声で集中できないという声もよく聞きます。

**吉田** そもそも、導入がとりざたされている「TOEFL iBT」は、アメリカの大学や大学院に行く人を識別するためのテストです。日本の高校生の九割は英検準二級に匹敵する四十五点程度ですから、これでは低すぎて、識別すらできません。C FERでいうところのB2、C1、C2の識別が可能になるにはもっと点数が高くなくてはいけません。ですから、用をなさないと思いますよ。

**鳥飼** CERFでは、Aが最も下で、B、Cとレベルが上がっていくのですが、日本

の場合ほとんどがAレベル。Bが若干名で、Cはほとんどいないというのが現状です。ですから、CEFRの日本版を作成したときには、Aレベルを細かく分類したんですよね。

### 読む、聞く、話す、書く技能を 判定する新しい試験を開発

**吉田** そうしたことを踏まえると、海外の制度をそのまま日本に導入するのはふさわしくありません。特にTOEFLは、レベル的にも内容的にも日本の入試に適しているとは言えないから、なおさら難しい。しかし、現にグローバル化の中で、英語を使った授業も増えていきますから、大学で教育や研究が十分にできる英語力があるかないかを問う、適切な試験問題が必要なことは確かです。

そこで上智大学では、公益財団法人日本英語検定協会と共同で「アカデミック英語能力判定試験（TEAP）」の開発を進めて実施しています。

これは、リーディング、リスニング、ライティング（記述式）、そして面接官との面接によるスピーキングからなる試験で、

新しい学習指導要領にも示された「読む」「聞く」「話す」「書く」の四つの技能が含まれています。加えて、CEFRのA2からC1まですべて識別できる仕組みにしています。さらに、能力判定試験ですから、年に三回受けられることにしています。

私たちが期待しているのは、この試験が起爆剤となって、高校の英語教育が向上することです。期待どおりの波及効果を及ぼすか否か、まだわかりませんが、日本の英語教育に貢献できればと期待しています。

**鈴木** 非常に画期的なことをされていますね。吉田先生が示されたように、多くの高校生の中から入学者を選抜するというレベルでの試験は必要でしょう。ただし、大学では進路先の企業などに授業をオープンにし、英語発信能力があることを直接見られるようにするほうが試験より効果的です。

立命館大学の生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部がプロジェクト発信型英語プログラムを展開しているのも、そこに理由があります。全学部生が自らリサーチを進め、自分なりの考えをまとめて、それをポスター・プレゼンテーションする。その様子をほぼリアルタイムでフェイスブック

上の本プログラム独自サイト (<http://www.facebook.com/ProjectBasedEnglishProgram>) で世界に発信する。そうした発信の「場」を設けてオープンにすれば国内に限らず国外にもアピールできるはずですよ。海外の大学院に進学する際にも、それらが評価の対象になれば、試験よりも、能力や創造力を直接判断する確かな資料になるはずですよ。

ライフサイエンスは、先端分野で多くのプロジェクトがグローバル規模で行われており、TOEFLのような試験も必要ですが、直接プロジェクトを見てもらうほうが効果的です。

先日、アメリカのある大学のライフサイエントイストたちが私たちの学生の発表を聞いて「こんな学生たちに来てほしい」と絶賛して帰りました。今はそういう時代です。アメリカのトップ大学が日本の優秀な高校生を直接リクルートしに来ている昨今、大学入試問題をTOEFLにするかどうかの議論はレベルが違うような気がします。

**仙波** 皆さんも指摘されたように、日本の教育は非常に横並び意識が強いことも事実ですが、今後の展望、あるいは取り組

むべき課題は何であると思われませんか。

**鈴木** 私はこの状況がいつまでも続くとは思いません。特に、その突破口になりそうなのがTPPです。

日本人は英語が話せないのが海外企業の進出を妨げており、その原因が日本の英語教育で、政府が放任してきたと思われています。日本固有の教育制度であるから、との言い訳は非関税障壁と見なされ、政府も手直しに動かざるを得ません。同時に、海外の大学や教育機関も参入してくるでしょう。さて、いったいどうなるでしょうか。

**仙波** それは非現実的な話ではありません。もう専門職レベルでは、株式会社立学校も設立できますし、そうした事例も出てきました。

**鈴木** そうなると、日本の教育が大きく変わりますよね。検定教科書をもとに一生懸命勉強して、文法を詰め込んだところで、ほとんど意味がないということがいよいよ明らかになってきます。

### 激変する日本の英語教育

#### これからの教育のあり方を展望する

**鳥飼** 日本の大学は明らかに二極化して

います。レベルの高い大学は志望者が集中しますから、高い倍率を維持していますが、片や定員割れを起こし、経営が行き詰まっている大学もすでにあります。

ならしてみれば、ほぼ全入に近い状況です。そうした中で海外の大学、あるいは教育プログラムが進出してくると、大変な事態が起こることも考えられます。

**鈴木** さらに、グローバル化の進展の中で、MIT（マサチューセッツ工科大学）やハーバード大学などでは、講義内容をオープンにしてどんどんICTで発信しています。

この傾向がさらに進むと、大学に入学せずに、好きなときに好きな講義をオンラインで視聴して学位を取得するというスタイルも定着するでしょう。もっとも学位を売る diploma millsには要注意ですが。そのあたりをしっかり踏まえた外国語教育が今こそ必要だと思っています。

**鳥飼** 現在は、英語の講義を増やすことばかりが目的化してしまっているように感じます。

英語で行う授業の割合を数値化するなど、締めつけが厳しくなっていますが、あまり

機械的にやっても効果はありません。中には全く外国人がいない、日本人しか受講していない医学部、教育学部、日本文学専攻の大学院でさえ英語での授業を強要される場合があるようです。これはグローバル化をはき違えていて無意味ですし、日本人学生が内容を学ぶことを阻害します。こういう事例は、効果が出ないどころかナンセンスですよ。

**吉田** 単に英語の授業を増やせばいいという問題ではありません。要はやり方の問題です。

上智大学ではCLIL (Content and Language Integrated Learning) という英語学習、教科教育、批判的思考、共同学習、異文化理解を有機的に統合した、内容言語統合型学習を実施しています。ヨーロッパ各国で普及している新しい言語教育法ですが、「四つのC」(Content = 内容、Communication = 言語、Cognition = 思考、Community = 協学) を柱に、教科教育や異文化理解なども通して、言語の習得も目指しているところに特徴があります。

さらに、英語教育だけでなく、本学への留学生に対してもCLILで日本語教育を

実施しているところも特徴の一つです。

鳥飼先生がおっしゃったように、授業の何%を英語でやりましようという考え方はあまりにも単純すぎると思います。むしろ、何%はCLILでやりましよう。それによって外国語に対する理解が増したら、MITやハーバード大学の講義内容もわかるようになるだろうし、留学もできるようになります。

そのようにステップを踏んで、学問的に見ても効果が明確であり、かつ利用しやすい教育手法を導入していくことが大切だと思います。

**鳥飼** 日本もグローバル化を進めるなら留学生への日本語教育については無視できない問題だと思います。

事実、あの東日本大震災の被災地には、数十カ国の外国人が暮らしていました。震災時には英語だけではとても間に合わず、NPOや東京外国語大学の学生たちが通訳や翻訳の多言語サービスに大活躍しましたし、やさしい日本語での情報提供が求められました。あまり英語一辺倒にならずに、日本語教育の充実も必要だと改めて感じました。

### 世界で最も英語教育にお金をかけた国としてのこれまでの経験を生かしたい

**吉田** 外国語教育は英語一辺倒になってはいけないという考えに私も賛成です。英語はいつでも履修者は多いのですが、中国語や韓国語は日本との関係が悪化すると、一気に履修者が減ってしまうんですね。私からすると、国家間の関係が悪化しているときだからこそ、履修してもらいたいという気持ちが強いのですが……。近隣の国との親交を深め、仲良くやっていくためには、むしろ中国語や韓国語のような身近な国々の言語は大事ですからね。

**高島** 私どものIB教育では最低、二つの言語を学習します。現在は日本語と英語が行われています。

日本語の授業は、長編の文学作品を教科書に出てくるさわりだけではなく、全部読破させ、授業でディスカッションもさせるなど、通常の高校生の国語の授業よりもはるかにレベルが高いものになっています。

さらに、ジャンルは英文学、ロシア文学、フランス文学など、世界的な古典ばかりで、最低でも一年に五冊の読書を義務づけてい

ます。IBクラスというと英語に特化するイメージが強いようですが、日本語教育も充実させているんですよ。

**仙波** どういうテキストを選ぶか、先生方も研究されるんでしょうね。

**高島** あらかじめ文学作品のリストは提示しますが、選択はあくまでも学生たちに任せます。もちろん、教師が読んだことがない作品をあえて読もうとする学生も出てきますので、その場合は教師も一緒に読む。そして、子どもたちと共に議論します。

**鳥飼** 日本の中学校・高校の国語の授業も、もう少し考えたほうがいいかもしれませんね。英語と国語が連携した授業など、新しい視点の授業があってもいいのではなにかという気がします。

**鈴木** ただ、あまり悲観することばかりでもないように思います。というのは、日本ほど英語教育に時間とお金をかけた国はないからです。それだけの経験の蓄積があるわけですから、それらを生かせば世界一の英語教育ができるはずですよ。知恵を結集してそのポテンシャルをぜひ生かしたいですね。

**仙波** では最後に、日本の大学はいかな

る学習支援環境を整備すべきなのか、皆さんのご意見をお聞かせください。

**鈴木** 先ほど立命館大学生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部で行っている英語教育について説明しましたが、そうした教育が実施できているのは、しっかりとした環境整備ができているからでもあります。英語の教員はもとより、ライフサイエンスの専門教員、外部教育機関など、学生を中心としたコミュニティが整えられ、さらに、学部や事務局も強力にサポートしてくれているのです。

なぜこのように手厚い体制を整備しているかという点、卒業後の学生たちに社会で大いに活躍してもらいたいからです。

私としては、学生たちが活躍する三十年後をつねに考えながら、学習環境を提供することが大学の務めであるとも考えています。そうした環境整備の成果が、就職状況も極めていいんです。今の時代は企業も、発信型の人材を求めていますから、日本語でも英語でもプレゼンテーションができる生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部の学生は、企業からも人気があるんです。

今後も多く優秀なライフサイエンティ

ストを社会に輩出し続けたいと考えていますし、世界一の英語プログラムにすることが夢です。日本で機能したら必ずや同じ問題を抱えるアジアの各地域でも機能するはずですから、今後が楽しみです。

### 教育は目先の成果 数値的な成果ばかりを追い求めるべきではない

**高島** やはり、教育は長い目で見るのが重要です。われわれ教員は、学生の将来を考え、どのように教え育んでいくべきか、どうすれば独り立ちできる人間になれるのかということをつねに意識していなければならないと思います。例えば、学生がわからないことがあつて、教師に聞きにきたときに、教員は懇切丁寧に教えますが、教えすぎも考えものです。それよりも、調べ方や考え方などを伝えることがよほど重要で、そこで学生は一步成長します。

もう一つ訴えたいことは、大学に対する考え方です。これまでわれわれも保護者も大学に入れたらひと安心というところがありました。本当は、大学はそれから先の人生のスタート地点です。そのスタート地点に立つ力をどれだけ引き上げていくか、そ

のことにこれまで以上に力を注いでいきたいと思えます。

**鳥飼** 鈴木先生から三十年後を見据えて教育を行うべきだとのご意見がありました。その視点は本当に欠かせないと思えます。今は目先の成果、しかも数値的な成果ばかり追いかける傾向にあります。教育とは、そういうものではありませんよね。

自律した学習者を育てることが重要だとCEFRは強調していますが、われわれ教員の使命もそこにあると思います。学びは学校で終わるものではありませんから、卒業しても自ら学び続けられる人を育てていきたいと思えます。

**吉田** 結局、それに尽きますよね。大学にかぎらず、教育機関は自ら調べ、学ぶ人材を育てていくことが大切です。

**仙波** 語学力を焦点にしつつ、グローバル化の中で求められている教育のあり方、課題や先進事例についてお話しいただきました。日本の英語教育もここまできたかと感心すると同時に、大学を取り巻くさまざまな問題に対する解決の糸口、手がかりが見えた座談会だったと思います。本日はありがとうございました。